

E q



作 北北東

お断り・・・この物語は全くのフィクションです。実在の人物はありません。

プロローグ

2016年3月15日 貧相で運動不足で不健康なお腹の丸みが強調され歩き方がのそり歩調の男、川口悟は還暦退職後2年目の春を迎えていた。夕方は天気さえよければ運動不足解消の腹ごなしのつもりで、散歩に出た。時には田んぼ道で鮮やかな夕陽を眺めることもあった。だがこの日は夕陽の近くには珍しい雲と夕陽の歪みを見た。「地震雲かな」と何の裏取りもなくただブログに書いてアップしていた。書いてる自分でもホントかな?と思いつながらなので予知もなにもあったものではない。ところが、それから1ヶ月後の4月14日 前震、4月16日日本震が起きた。熊本大震災である。地震といえば悟が中学生だった1968年2月21日10時44分マグニチュード6.1(前後に前震・本震・余震と続いた)の地震とえびの群発地震のことを微かに覚えている。日向灘での地震もあったはずだが記憶にない。近年では福岡の地震(福岡西方沖地震 2005年3月20日発生)の場合、熊本ではそれほどの被害もなかった。その割に悟の記憶にしっかりある。なぜかって・・・喫茶店でケーキセットを食べていた時、急にトイレに行きたくなって洋式トイレにまだ慣れてない悟は和式座りで用を足していた。その時、身体が左右に揺れたのに驚いて危うく便器から落ちこちそうになる。悟は左右の手で壁を必死に支えていたということが扁桃と海馬を通してしっかり記憶されることになった。そんな僅かな体験しかない悟だ。

熊本で代表的な自然災害といえば秋の台風と初夏の洪水だ。特に梅雨明け前の洪水には頭を悩ませる。悟の住む熊本市南部では田んぼの高さが道路とほぼ変わらない。よく見ると道路より高い田んぼだってある。少し考えると分かるが梅雨時期では満水の田んぼから溢れ出す少しの雨水で道路は冠水して通行できなくなる。それで田んぼ全体を数メートル嵩下げしたら毎年の苦労は減るといふ素人の考えだ。田んぼ全体が洪水の安全弁（一時的ため池）にもなる。このように地形を変更しないと多額の税金を使って河川工事をいくらやっても同じ事だ。

その他には生命を脅かすようなものは滅多にないが火山噴火による災害がある。熊本は火の国といわれる元になった阿蘇が黙々と煙をあげている。時々小噴火し、火山灰が火口周辺に降り注ぐ高森などでは農作物が被害を受けたというようなニュースが時々流れる。そればかりでなく有明海を挟んだ雲仙普賢岳の噴火も経験した。1991年6月3日では火砕流で沢山の人が亡くなったことは鮮明に覚えている。あの日は空が真っ黒になって乗っていたバイクがスリッパしそうになった。その日看護師の妻小百合は午後9時過ぎまで仕事だった。だから保育園の迎えは悟の役割で国道57号線東バイパス走行中に空が真っ黒になって火山灰が降ってきた。それが路面に積もってツルツルとタイヤが滑る。今転んでは大変「誰が娘を迎えに行ってくれるのだ」と、必死にハンドルを立て直していた。その時普賢岳の角は真っ黒の猛煙に覆われ対岸50km先の道路にまで黒いツブツブの灰を落とすのだ。地元阿蘇山の場合、雲仙普賢岳の比ではない一度阿蘇が破局的噴火を起こすと九州は全滅だ。阿蘇の火山灰と溶岩で作られた九州の大地、火山を

悔ってはいけない。(・・・のだが今回はあえてふれないでおこう。)

そんな悟の長い人生の中、初めて本格的な地震に直面したのは4月14日(木曜日)午後9時半。熊本市南区の自宅はよく揺れた。朝新聞受けに新聞を取りに行ったら「よう揺れましたな」と隣の爺さんが声をかけてきた。「そうですね。でも次また大きいのが来るかもしれませんな」悟は根拠もなく口からそんな言葉が出てきた。「そうそう、必ず大きいのが来るとですけん用心せななんですな」と爺さんも分かっていたようだ。そんな近所との会話をし、営業日である土曜15日は西原村大森のカフェの店舗へ向かった。朝早く家を出てきたが、途中の益城では被害が出ているようなので、いつもとは違う空港線を利用した。到着は開店時間の10時丁度、大慌てで準備に取りかかる。最初の地震のあとは必ず本震が来ると悟自身がここでもカフェに来たお客さんに受け売りして、いかにも自分で確かめたように力説していた。それを聞いて百合子は又あの話してるわとクスッと笑っていた。悟は次の客にも「次が本番の揺れだから用心してね」と話していた。さすが地震の翌日は物好きなお客さん3名だけだった。

震災2日目の夜

カフェを5時に閉めて、百合子は夕食の準備を始めた。悟は2階に上がって、天日(太陽光湯沸かし器)の水を落とし風呂の準備を始めた。いつもは週末営業に備えて金曜日から土曜日まで

2階に泊まっている。百合子は料理しながら、茄子に鯉節をかけているとき、我が家の猫“チャメ”のことが気にかかった。鯉節を足下でいつもねだっていたからとチャメの顔を思い浮かべていた。あの地震では奇妙な大声をあげ騒いでいたのだが、今日の出がけには留守番を頼むつもりで声かけしようとしてが見当たらなかった。もし外に出したままだったかと急に心配になってきた。7時のニュースを見ながら、益城町での被害映像のあと気象庁の専門家の話に耳を澄ませた。「この地震の余震に注意してください」と繰り返していた。予想では地震の震度より少ない値を示し、この数週間は用心してくださいと喋っていた。時々小さな余震が窓を揺らせる。「ご飯を食べながらテレビ画面から目を離して、百合子は悟に「猫が心配だから一度家に帰ってみたい」と自宅へ帰ることを誘った。「風呂上がりのビールは格別ばい」と顔を赤らめた悟は、「まあ明日1番に猫の様子を見に行くから」と百合子を宥めた。それでも百合子には家に入りたくて暗い玄関に座り込んでいるチャメの姿が目には浮かぶ。「でも帰りましょう」「明日また来ればよいから」というが、昨夜の地震で疲れていた悟は頑として首を縦に振らなかった。いつもは妻の助言にすぐ同意する意思薄弱の悟だが、その夜は前日からの寝不足で頑な態度だった。

「分かった。じゃあ私は猫が心配だから帰ってくる」と悟から車の鍵を受け取って西原村の森の中のカフェを出たのは、午後9時を過ぎていた。「気を付けて」と玄関まで悟は見送った。帰るときも空港線で自衛隊の通りを抜けて国道57号線東バイパスに出た。大きな地震があった割には、町の明かりは普段と変わらない。百合子は「チャメ」の安否だけが眼中にあって町の光を出してきた。

「あらチャメ、元気だった」百合子が頭を撫でてやると嬉しそうに乾いたコンクリートの上でゴロンとひっくり返って喜びを表わしていた。良かった、帰って来なかったらチャメは外で一夜を明かすところだった、と胸をなで下ろした。家の片付けをして、そしてパソコンを開いていつものようにゲームをした。猫の餌入れに朝出がけに入れていた餌に気づいてチャメは満足していた。満腹したら小百合の傍らで眠り始めた。やがてゲームに飽きて1時過ぎに階段をあがり、2階の寝室で横になった。数分もしないうちに深い眠りに入り込んでしまった。その30分後にはマグニチュード7.3の本震で揺り起こされた。ベッドの上に本棚が半分置みかけるように倒れそうになるが本ばかり散乱した。悟が念のためにと設置した転倒防止用の支えがあつて棚自体が倒れ込んでくることはなかった。長い揺れの始めで電気は消えた。しばらくベッドに長くなっているしかない。ようやく昨日からベッドの横に用意していた懐中電灯を探し出して、携帯ラジオの電源を入れた。

一方、山では悟は、眠いのになかなか寝付けないでいた。テレビでは余震の震度が頻繁にテロップで流れていた。さあもう寝ようと12時頃に2階和室に布団を敷いた。もう余震は大丈夫だろうと思つて布団に入った。悟は横になったものの、睡眠が浅く、起き上がつて携帯電話を手にとって時間をみた午前1時20分、まだこんな時間かと思つたとトイレに行きたくなった。起き上がつて廊下の奥にある2階玄関脇の洋式トイレに屈んだ。トイレに入る時は携帯電話と雑誌を持ち込むのが癖だった。既に洋式に馴染んでいた。10分ほど座るも小ばかりで大は出そうもない諦めて立ち上がったのが1時30分、帰りの廊下の左側が台所で、喉が渴いたので水を飲もうと水道をひねつてコップを持った。

その時だ、まずガタガタとする不気味な音、そして左右の揺れ、強い上下の揺れがきた。左右の食器棚が中央のテーブルに倒れかかった、振り向くと同時に左右の棚がテーブルに強くぶつかり合つて音をたてる。瞬間に電気が消えて停電になった。真つ暗な中で、まだ大揺れが続く、ガラスの割れる音、外の方でもガシャリと割れる音は瓦だろうか。既に悟は身動きが取れなくなっていた。アツ 裸足の足がガラスの小破片を踏んだ。血が出ているらしい・・・が真つ暗な家中、月明かりが唯一の頼りだ。

携帯電話も地震警報の合図を鳴らしたままで何も音が出ない。中継所がやられたのか。まだ動くのはまずい。悟はその後の揺れをやり過ぎしながら明るくなるのを待った。こんなのは一昨日の余震ではあり得ないあれより数倍揺れた。早く地震の情報が知りたかった。一軒下の下田さん、月明かりが唯一の頼りだ。

携帯電話も地震警報の合図を鳴らしたままで何も音が出ない。中継所がやられたのか。まだ動くのはまずい。悟はその後の揺れをやり過ぎながら明るくなるのを待った。こんなのは一昨日の余震ではあり得ないあれより数倍揺れた。早く地震の情報が知りたかった。一軒下の下田さん、月明かりが唯一の頼りだ。

夫妻は大丈夫だろうか。車があればラジオで知ることができるのだが、今はなすべきもの、身を守るものがない。

俵山の裾野にあるその名も裾野地区に村民が集まれる場所として集会場がある。

何か一大事があると地区の住民が集合する場所だ。普段は空き地だが、老人会のグラウンドゴルフ場にも使っている。夏には夏祭りの会場でもある。湧き水の水汲み場の上にあつて、狭い集落に集合がかけられたのは午前3時。

消防の若者が近隣の道路の状況をみてまわる。地区住民はしばらくこの地で夜を過ごすことに。四月といえどまだ寒い、子ども達は毛布を抱えて座り込んでいた。その中に下田さん夫妻も居た。下田さんも揺れで慌てて飛び出そうとしたのだが、襖が開かない状態で、しばらく閉じ込められた。裏口からなんとか出て集会所へ急いだ、懐中電灯を探すのに手間取った。2人で足下を照らすと民宿をしている南さんの石垣が壊れていた。岩を避けて、本道に出て、なんとかうまく辿りつけた。腰を痛めている下田さんにとっては移動すること自体が大変なことだった。時々大地が揺れる。大きな岩が道路を占領しているので消防車での往き来は相当困難だ。

道路を探索していた消防団員が帰ってきて手には大きめのランプと拡声器をもっている。その拡声器で「県道はダメ、橋と森林ダム(人工湖)の堤防が壊れかけている」と報告した。どよめきがわいた。「ダムが決壊てや。そらあ下の集落が水に流さるっぞ」、「今一人降りて言つて村民

に避難を伝えています」と消防服の若者が応えた。集落の区長と消防団長は住民の前面に出てパニックを押さえるように静かに夜が明けるのを待とうと大声で伝えた。みんな初めての経験だった。「恐ろしかったなあ」異口同音に揺れの瞬間を伝える会話があちこちから漏れてくる。集会場の近くに住む一人暮らしの八重婆さんは皆の顔を見ながら安心していた。「ああたも無事だったか。よかったよかった」隣の池辺さんが励ます。震災という困難を前にして、小さな集落が一つになったという感じだ。

その集団から離れたところにいる悟は、陶器やガラスの破片で足の踏み場もないと言い方が当てはまる地震現場でじっと揺れが収まり、周辺が明るくなるのを震えながら待った。そのうち、テーブルも足が折れるような気がして、このままではヤバイと悟は台所の洗い場に登っていた。外の様子を見ると瓦が随分遠くへ飛んでいるのがみえた。鬼瓦が20^三先に見えた。時折の余震で、さらに上の物が下に引きずり降り落ちて壊れる衝撃音が森の中に響き渡った。森の原木、楠や檜も余震に身を任せてよじって揺れた。

地震予知について

40年以上も前、1970年代前半、学生時代を大阪で過ごした悟はラジオだけが唯一の情報源だった。関西のラジオでは、ある語り手によって椋平虹の話聞いたのが微かに覚えていた。

椋平虹というのは昭和初期、虹を観測して地震予知を行っていた。予知の確率86%と高いと話題になった。時の京都帝国大学の石野友吉博士は京都の天橋立で偶然、椋平廣吉青年と出会った。地震予知は現在でも不可能と言われているが、当時、椋平は「地震を予想する」というのだ。予測に使用するのは分度器。それを用いて「虹の切れ端」のような像をスケッチして、それを元に、虹の形^二震源の方向、長さ^二距離、色合い^二震度（地震の大きさ）虹出現時間^二地震発生時刻を計測した。博士は「地震予測が出来たら知らせて」と別れたが、律儀に椋平青年は博士宛に電報をおくった。「アスアサイツ 四ジジシナルムクヒラ」その電報をみてビックリした。今朝の伊豆南方地震が的中したのだ。消印は昨日、一体これは何だろうと驚いた。それから電報は送り続けられた。虹の観察を60年も継続したのはすごい執念だった。この行為には絶賛の反対にベテンだという声もわき上がった。そのメカニズムが不明だという理由で、罵られ葬られた椋平だった。マスコミが一時的に味方になって絶賛したり、あげくは突き放したりした近年のSTAP細胞騒動にも似たものだ。周囲の圧力に負け最後には自分宛に予測はがき（地震後に予知を装って記入）を出して確率を高めるといふ非常手段を使ったことが明るみにされて以来、晩年は誰からも相手にされなくなった。しかし若い頃は電報という手段で予知を行って知らせていたことを考えると、周囲の中にばかり拘る反応が自らを誤らせてしまっと思えない。現在では詐欺師の一人とか、椋平虹という現象そのものを珍しがってオカルト分野への分類などされているが、立ち返って原理を少しでも研究してみたらどうだろうか。はたして椋平（1992年

没)が生存していたとしたら、2011年3月11日を予想したかどうか。そして2016年4月14日からの一連の熊本大震災を予測しえたかどうか。

つづく

2016年6月30日書き始め。